

# ノヴァーリスの初期叙情詩

—— ピエティスムスと死のイメージについて ——

三 木 恒 治

岡山理科大学教養部

(1993年9月30日 受理)

## 序

ノヴァーリスの作品はゾフィーの死を契機に開花、従ってこれを抜きにしてはノヴァーリスを語ることはできない、というのが R. ウンガー<sup>1)</sup>や若き日の B. v. ヴィーゼ<sup>2)</sup>に代表される従来の方の研究者の見方である。しかし比較的新しい所ではこのゾフィー神話一辺倒の見方に疑問符を付しているものも目につく。H. リッターは、ゾフィー体験よりも、むしろ彼女に次ぐ J. v. シャルバンティエとの二度目の婚約の及ぼした影響を重視し<sup>3)</sup>、ゾフィー神話を奉じる F. シュトラック<sup>4)</sup>と鋭く対立しており、R. ザムエルはゾフィーと同じ頃に逝去した弟エラスムスの死の補完的役割にも注目している<sup>5)</sup>。また M. ディックはゾフィー体験の重要性を認めつつもフィヒテ研究に創作の原点を見ており<sup>6)</sup>、E. ヘフトリックは創作を伝記的領域から切り離して解釈しようと試みている<sup>7)</sup>。

このようにゾフィー体験に関しては色々と取沙汰されているが、いずれにしてもゾフィーと出会うまでのノヴァーリスの十代の作品、つまり300を越すとされる初期の叙情詩について彼らの間で取り上げられることはあまりなかった。しいて挙げるとするならば、古くはヴォルフが「叙情詩の発展史」(1928)で、シラー、ヴィーラント等、同時代人の詩作品との比較を兼ねて、ノヴァーリスの初期の叙情詩を諸テーマに分類し考察している<sup>8)</sup>。確かに限られた範囲のもので少々主観的な印象は拭えないが、これは以後の研究者の範としてしばしば引用されている。最近では M. ザイデル女史が「未発表のノヴァーリスの初期の宗教的叙情詩」で、ノヴァーリスに影響を与えたクロップシュトックの「永遠のヴィジョン」という宗教的観点から、より高次なものへの導き手としての「死」の問題を考察している<sup>9)</sup>。他にも H. J. メールの「ノヴァーリスの作品における黄金時代の理念」のようにユートピアの形態を念頭に置き詩を分類しているものもあるが<sup>10)</sup>、このような初期の作品に重点を置いた研究は、ごく僅かに留まっている。しかし彼の揺籃時代を探って行く際、日記や書簡が殆んど残されていないことを考え合わせると、彼の胸中を伝える貴重な証言となっているこれら一群の詩作品こそ唯一の手懸かりとすることができ、その後の彼の発展の軌跡を解き明かす鍵が潜んでいるように思われる。本論はこの時期に焦点を絞り殊にノヴァーリスの創作の主要テーマを成している「死」の問題の原点に迫ってみたい。尚、詩

の整理番号は、クルックホーン、ザムエル編 Novalis Schriften, Die Werke Friedrich von Hardenbergs, Dritte, nach den Handschriften ergänzte, erweiterte und verbesserte Auflage in vier Bänden und einem Begleitband Stuttgart : Kohlhammer 1977に依った。

## 1

彼の最初の詩は1785年、十三歳の時のもの („An die gnädige Tante von Gera“)<sup>11)</sup>であるが、次のものまでに二年の空白期間があり、実質的にはこの第二作目が詩作の出発点だと考えてよい。その表題 („Auf den Tod Zollikoffers“ 「ツォリコファー氏の死に寄す」<sup>12)</sup>)からして既に死の陰影に包まれているわけだが、初期の詩作品の流れを辿って見ると、全体的には次のように時期区分ができる。まず2から14までの身近な人物、情景を卒直に歌った最初期のもの、15から26までの死、無常感が基調となっているもの、27から36までの思春期に特有の心情の両極間での激しい揺れ動きを映し出すかのように情感の明暗が混在しているもの、38から62までの現世の享樂を肯定したアナクレオン風のもの、63から72までの実存的な調子で死を觀察したもの、73から88までの明るさを再び取り戻したもの<sup>13)</sup>、89から95までの宗教的色彩が濃厚となり論理的に死が語られているもの、96から103までの牧歌調のもの、104以降の諦観的に死の光景が描写されているもの、という分類になるが、このなかでは89から95までの七番目の時期のものが表現も洗練されまとまりのあるものが多く、後の作品との関連も深い<sup>14)</sup>。

このように概観して見ると、初期の叙情詩は「死」の主題の変奏曲の様相を呈していると言っても過言ではない。作者自身八歳の時重病に罹り生死をさ迷う体験をしており、「死を恐ろしい理念と結び付けるのではなく、美しく愛らしい衣を着せることに慣らされている」<sup>15)</sup>と述懐しているが、これは彼を育んだ家庭環境と密接な関係がある。彼の父親は17世紀末プロテスタント内部で起った改革刷新運動であるピエティスムス（敬虔主義）の熱烈な信奉者であり、その影響で彼は聖書の知識を未だ身につけていない幼年時代から既にその教えに自然な形で入って行ったとされている。ピエティスムスの教義によると、死は神の恩寵によって新しい人間に生まれ変わる契機となる敬虔な体験とみなされ、自らの意志を放棄し神の意志に従い運命を従順に受け入れることでこの境地に達することができるのである。従って当然のことながら死は再生の意味合いが強く、悲しむべきことではなく子供が眠りに着くのに等しいようなものであり、むしろ生の方が過渡期で現実は一瞬の姿という見方が通常のものとなっている。そして言葉は魂の深層を揺さぶり愛情を呪出し、人間が福音を授かることを可能にする手段とされている。彼はその教義、言語形式<sup>16)</sup>に関しては狂信的な父親から、「死」に対する瞑想は内省的な母親から受け継いだとされているが<sup>17)</sup>、ただヘルンフト派を設立しピエティスムスの急先鋒となったツィンツェンドルフ等とは異なり、性を禁欲的な宗教のアウラで包み隠してしまうということはない。ノヴァーリスの場合宗教性はより多様であり、人間に代わって罪を償ったキリストが仲介者となり魂が

永遠に神と共生できるというピエティスムス特有の宗教観と並行して彼の作品にはっきりと表れているのが、カトリックの特徴でもあるマリア崇拝である。また個の生が死によって神の胎へ帰り円環をなして完全なものとなるという構図は、新プラトン主義の世界観とも相通じ、外界には視線を閉ざし、ひたすら内面を見つめることで世俗の殻を捨て去り、神秘的なものと対峙し世界の奥義を見極めようとする姿勢は、神秘主義の根底に脈打っている思想形態でもある。他にも古代錬金術やヘレニズムの融合主義等の雰囲気も漂い、一言で片付けることはむずかしいが<sup>18)</sup>、いずれにしても死を通じて(実際の自身の死ではなく、他者の死という疑似体験ではあるが)彼岸の広がりが生領域に与えられ、「世界」と「夢」が、不可分なものとなるというノヴァーリス馴染みの構図には今述べたような背景が考えられる。

このように死へとベクトルが向けられた生がノヴァーリスを衝き動かして、その際さまざまな精神的現象が彼の創作へと収斂して行くのであるが、差し当ってピエティスムスはその牽引的役割を果たしていると言えよう。

## 2

ピエティスムスの特徴が最も明確な形で表現されているのは「聖歌」(1802)<sup>19)</sup>である。「夜の讃歌」(1800)で鮮明な形をとって描かれている、彼岸と此岸、光溢れる内面と外界の暗闇という二元的世界の対立項に加えて、ここではキリストの生の変遷が個の生にまで敷延され、宗教色が極めて濃厚な作品となっている。しかしこうした特徴は、初期の叙情詩で既に見られるのである。2の „Auf den Tod Zollikoffers“ は、彼が十七の時、ライプツィッツの説教師の死にあたって書かれたものだが、死はここで、時間に拘束され絶え間なく「嘆きの谷」<sup>20)</sup>を流離う宿命を負わされた人間が最後に落ち着く安らぎの地と見なされている。同じく3の „An meinen Vater“<sup>21)</sup>では満ち足りた生の自然の終焉としての死が語られ、さらに7の „An meinen Onkel“<sup>22)</sup>では死は生の指標 („des Lebens Ziel“) と規定されている。彼岸を肯定的に受け止め此岸を二次的なものとするノヴァーリスの創作の性格は、これら最初期の詩でもはっきりと表れているのである。勿論、初期の詩の中には「死」を題材にしたものばかりではなく、生を享受するアナクレオン風のものも含まれてはいるが、R. ザムエルも指摘するようにそこにも「死」の臭いをかぎとることができる<sup>23)</sup>。ただそれは生が死の影に浸食されているというより、確固とした彼岸への信頼に生が裏打ちされているのであり、死がポジティブに扱われている余りに、生をも力強く抱え込んだものとなっているという印象のほうが強い。いずれにせよ、このようなピエティスムスの色調が初期の叙情詩群の前半部を支配しているのである。

しかしこの実り多き「死」も、父親、妹というより身近な存在に至ると様相は変わってくる。既に23の „Elegie auf einen Kirchhof“<sup>24)</sup>等でも死の容赦ない力は叙述されているが、63以降のものでは明らかにアナクレオン色は一掃され、死のネガティブな面を強調する表

現が多く出てくる。63の „Die Thränen“<sup>(25)</sup>では死の酷烈さを表すために、小鳥という古代の死のトポスが用いられ、さらに „marmorn“ „eisern“ という形容詞によって、その冷厳さが強調されている。この時期特に目を引くのは、死に行く妹に捧げた66の „An meine sterbende Schwester“<sup>(26)</sup>、溺死した若者を弔った68の „Bei der Beerdigung eines ertrunkenen Jünglings“<sup>(27)</sup>、詩人ヘルティーの早世を惜しんだ70の „Als ich an Höltys Gedichte schickte“<sup>(28)</sup>のように花の盛りにある若者を無情にも連れ去る死を扱った作品である。他にも父の墓で歌った67の „Am Grabe meines Vaters“<sup>(29)</sup>、戦場での死を扱った71の „An die Muse“<sup>(30)</sup>、……と、とにかく死一色に染め上げられている。

この情況は、恰も幼くして死の深淵へ降りて行った原体験の死の脅威が頭をもたげ、ピエティスムスでは処理しきれない虚無感へと引き摺り込まれたかのようなのである。永遠の展望は雲散霧消し、個々の者にはこの世での限られた時間しか与えられておらず、死でもってそれは幕を閉じるという無常感に包まれている。過渡期としての生の有り様が、負の展開を見せるのである。ここでは血生臭い現実が理念の世界を押し潰し、メランコリーが生意志を突き崩している。

しかしこうした危機に直面した時、時間を置いて必ず彼は精神の基幹とも呼べるピエティスムスの世界へと立ち帰り、その都度詩的創造力は磨かれ、実存的体験と調和を見るに至る。そして禁欲的な生活を幸抱強く耐えた褒美に至福をもたらす使者として「死」が表現されている72の „Auf den Tod meines Onkels“<sup>(31)</sup>のように、より高い見地から死を見下ろして行くことになる。このような弁証法的展開は後にゾフィー体験で同じような経過を辿って繰り返される。

後にゾフィーの墓での幻視体験の一月前「死を乗り越える力を新たに獲得できた」<sup>(32)</sup>とイエーナの K. L. ヴォルトマン宛に書いているが、その聖化された死者を通じて生者は現実の領域を超越して行くという精神構造の図式は、初期の詩において既に十分検証されるのである。

### 3

初期の詩における死の表現の推移を主としてピエティスムスのテーマに沿って概観してきたが、その言語、形象、或いは技法に目を向けると、彼が死を一様にではなく複視眼的な角度から捉えていたことがわかる。例えば英雄の死を讃えた19の „An Joseph den 2 ten“ (「ヨーゼフ 2 世に寄す」)<sup>(33)</sup>では、„Lorbeerschimmernden Tod“ というように死にヒロイックな形容が与えられている一方、血にまみれた死体を連想させる „blutige Schwerdter“ „blutbefleckte Fahnen“ のような „Blut“ の派生語が頻出、また17の „An Friedrich Wilhelm“ (「フリードリッヒ 2 世に寄す」)<sup>(34)</sup>では、古代ゲルマンの死の神話を讃えつつも幻惑されることなく、それに駆り立てられて死に行くものの絶望感、不安におののく遺された家族のやるせなさを切実に伝えている。

このような、壮絶な死に対する熱狂的な感銘、そしてそれとは裏腹の戦場の凄惨さ、死に対する嫌悪感、といったピエティスムスとは全く異なった切迫感溢れる死のイメージも初期の死の特徴の一つに挙げられる。死の二律背反的なイメージとしてよく使われるのがエロスと表裏一体となった死、いわゆる „süßer Tod“ のモチーフである<sup>35)</sup>。35の „Die Betende“ (「祈りを捧げる者」)<sup>36)</sup>では、 „Todes Trösterhand“ (死の慰めの手) が祈りの喜びを与えてくれ、102の „Mein Wunsch“ (「私の願い」)<sup>37)</sup>では、愛する者の腕の中で死にたいという願望が述べられている。なかでも最も典型的なのが水浴するものを死の抱擁で包みこむ水の精 Najade のフィグール<sup>38)</sup>で、68の „Bey der Beerdigung eines ertrunkenen Jünglings“ (「溺死した若者の埋葬にて」) では、アモールに代わって松明を逆さに掲げ、死の使者として若者を誘う。感觸的に心地好いものであると同時に溺死の危険も孕んでいる水の魅力こそエロスと死の本質であり、ゲーテの „Der Fischer“ (1778) を模したとされる57の „Badelied“ (「水浴の歌」)<sup>39)</sup>や106の „An die Wippernymphe“ (「水の精に寄す」)<sup>40)</sup>でも、若者が水に魅せられ死に引き寄せられて行く<sup>41)</sup>。「死」の出現を待つて性の愉悦という地上での感性が彼岸の領域へと移行、昇華して完全なものになるという構図は、ヘルダーの „Paramythen“<sup>42)</sup> (1785) や、古代キリスト教に見られる魂の婚のモチーフ<sup>43)</sup>にも触発されたものと言われている。

敬虔深い生活からくる不協和音のない安らかな死に加えて、ここで述べたような情念に深々と浸された死が数多く登場するが、このような死の相貌の二元性、複合的イメージは、本能的に死をかぎとる直感だけでなく、それを抽象的な言語表現の地平で技巧的に組み合わせ全体像にまで高めて行く冷静な観察眼も同時に働いていることを、如実に物語っている。

このような死の表現が修辭的にも洗練され、内容も重厚さを増して、初期の叙情詩の円熟作となっているのが、89の „An den Tod“ (「死に寄せて」)<sup>44)</sup>と90の „Die Auferstehung“ (「復活」)<sup>45)</sup>であろう。それでは次に、この „An den Tod“ を見ていくことにする。

### An den Tod

Wie der Seraph himmlische Lust erfüllet,  
Kommt der Bruder einer, auch selger Engel,  
Den des Himmels Freundschaft mit ihm verwebte  
Zu dem unsterblichen Bunde.

Wieder von der fernesten Welten einer  
Wo er Glück und Segen die Fülle ausstreut  
Heitre Ruhe mit friedlicher Palme über  
Tausend Geschöpfe ergoßen,

Und nun fällt in Engels Entzücken seinem  
 Freunde an die himmlische Brust und dann im Kuße,  
 unaussprechbare Freundschafts Wonne  
 Einet die Seelen der Seraphs.

So werde ich mich freuen wenn du einst holder  
 Todesengel meine geengte Seele  
 Zu dem selgen Anschau'n Jehovahs durch die  
 Trennung vom Körper beflügelst.

Und sich dann die Neidische Hülle abstreift  
 Gleich der Puppe welche den Schmetterling hält  
 Und zerplatzt kommet die Zeit der Reife,  
 Jener befreyt dann entfliehet.

So wird sie auch fliehen die edle Seele  
 Aus dem Erdenstaube entlastet dort zu  
 Jenen höhern, bessern Gefilden reich an  
 Seliger Ruhe und Freyheit.

Wo ein ewger Frühling die Wangen kleidet  
 Und ich voll unsterblicher Kraft die Schöpfung  
 Sehe, staune, himmlische Freundschaft mich  
 unsterblichen Geistern vereinet.

熾天使ゼラフィムが天上の喜びを満たすように  
 兄弟である聖なる天使が一人降りてくる  
 その天使を天上の友情が彼と織り合わせ  
 不死の絆へと高める

再び遙か彼方の世界の一つから  
 そこで彼は幸福と祝福を余すところなく撒き  
 椰子と共に陽気な安らぎを  
 幾千の被造物に降り注ぐ

そして今天使の恍惚のさなか  
 友の神々しい胸へ飛び込み  
 接吻に包まれ言い表し得ない友情の喜びが  
 熾天使たちの魂を一つにする

私は嬉しい。もし汝優しき

死の天使がいつか私の窮屈な魂に  
 畏くもエホバを觀照させてくれるなら  
 私が翼をつけ肉体に別れを告げることで

そうすれば恨めしい殻は剥ぎ取れる  
 ちょうと蝶をくるむ蛹にも似て  
 そして時は熟して弾け  
 かの者自由となり飛び去って行く

同じように高貴な魂も世俗の塵を  
 振り落とし、かの地の  
 もっと気高く恵み深い  
 至福の安らぎと自由の溢れる野へと向かう

そこでは永遠の春が頬を包み  
 私は不死の力に満たされ、神の為せる創造の業を  
 見、驚く。天上の友情が私を  
 不死の精霊へと合体させるのを

全体は七節から成り、初期の作品としては複雑な構成をとっており、かなり完成度の高いものである。内容的には第一節から第三節までは彼岸、第四節から第六節までは此岸、そして第七節は再び彼岸を描写し、第一節へと繋がって行くという円環的構造となっている。

表題で示されている „Tod“ の語句はそのままの形では表れず、「天使」等の象徴を纏ったり、第一節の „ihm“ のように明言を避けた代名詞によって間接的に語られている。そのため死のイメージは限定されることなく、広範な意味が託される仕組みになっている。ここで死は彼岸と此岸の中間に位置しているが、侵略者として両者を分断するのではなく、両者を融和し結び付ける仲介者として „du holden Todesengel“ と親しみをこめて二人称で呼びかけられ、魂をして至福を得さしめるヒャーロンに似た役割を果たしている。この詩のテーマは「死」そのものというより、死によってはじめて開示される状態であり<sup>46)</sup>、それは両世界での人間存在を包括したものとなっている。

イザヤ書にも出てくる6枚の翼をもった熾天使ゼラフィムは、最高の愛の炎を運ぶ者、神に最も近く立つ者であり、天上へと死者を導く。„Glück“ „Segen“ „Ruhe“ は彼が被造物に与える祝福である。そして „Lust“ „Entzücken“ „Bunde“ „Kuße“ „Freundschaft“ „Freundschafts Wonne“ (「友情」はピエティスムスのキーワードでもある) という精神的にも官能的にも幸福な状態を表す語によって彼岸の領域が特徴づけられており、„unsterblich“ „himmlisch“ „unaussprechlich“ という形容詞の同類語句の反復によって、その度合いが一段と強められている。

一方第四節以降は、一人称で語られる身近な此岸の世界が、„Trennung“ „Staube“ „geengte Seele“ „neidisch“ というネガティブな表現で描かれている。しかし現世は決して出口なしの状態ではなく、„so werde ich……“ „so wird……“ という未来形からもわかるように、死を待つ過渡期であり、彼岸へ向けての希望、期待の姿勢が窺われる。死によって肉体という殻を捨て去り、高貴な魂へと変容し最高神エホバを觀照することが許されることが、ここでは蛹から成虫へと脱皮し、翼をつけて大空へと飛び立つ蝶に喩えられ、比喻による意味連関の結合と、一人称の持つ求心性によって天上の世界が引き寄せられている。

また、最終節が第一節へと高まって行き、„verwebte“ という語で第4節から第7節までがそこへ凝集されるという作品構造によって、ピエティスムスと合致する時間の循環性が生まれている。さらに死の介在によって天上と地上の間で生じる相互浸透による垂直の力動感がそれに加わり、壘乗効果が醸し出されている。このように、永遠の樂園状態が透視されるよう幾重にも張り巡らされた漸層装置からは、ノヴァーリスの、後にはより尖鋭な形をとる、死の彼方に窮極の一者による救済を模索し、宇宙と自己との関係を限り無く問い続ける視線が垣間見える。

次の„Die Auferstehung“ は表題からもわかるようにキリストの復活を歌ったもので、宗教的色彩はさらに濃いものとなり、地上の人間に代わって「死」と「再生」を体現しているキリストがはっきりと歓喜、祝福の導き手として登場し、その生の変遷に個々の者の生が敷衍され、作品全体がここでも普遍的な広がりを見せている。また„Berge jauchzet“（山が歓声をあげる）„Hügel hüpfet“（丘が飛び跳ねる）„Heiter lachen die Gefilde“（高らかに野が笑う）というふうに感情の高揚を伴って自然が擬人化され、矢継ぎ早に連なる短い詩行によって溢れる喜びに拍車がかかっている。また太陽の輝きは地上における樂園の照り返しとされ、神的領域から地上へと降り注ぐ光線 („Lichtstrahl“) の形象によってこの二つの世界は浸透し合い、繰り返される親称によっても両者は互いに身近なものとなっている。

以上見てきたように、ピエティスムスの信仰に由来する死にまつわる救済のイメージが、この二作では個の次元を超えて、死という不可避の運命を背負う万人に向けられたメッセージとなっている。

#### 4

これまでの考察からわかるのは、ゾフィー体験は一人の女性の死によって突如として喚起されたというより、その表現の原型は早い段階から準備されていたということである。ただゾフィー体験以後の作品では、この「死」の表現形態はより体系的に構築されることになる。「聖歌」や「夜の讃歌」といった韻文作品は無論、散文の代表作である「ハインリッヒフォンオプターディングゲン」でも「死」のモチーフが多様に展開され「死」の主



題の集大成と呼ぶにふさわしいものとなっている。ここではピエティスムスの永遠への展望を模索しようとする姿勢が、韻文の制約を超えたかすかすの技法によって——例えば物語に挿入されている「夢」や「メールヒエン」の部分は、非日常的な体験として「死」のヴァリエーションと解釈できる。その他、城主、隠者、鋤夫など主人公が会うさまざまな人物の口を借りて「死」が語られ、また登場人物どうしの対話（ディアロックに内在する弁証法的本質も手助けとなるのだが）を通じてその意味が追究されるという重層的構成となっている——推し進められていく。世界は暗い坑道であり、そこで自らの責務を果たすことが天上での報いに繋がるという鋤夫の話はピエティスムスの思想を映し出しており、妻子の死によって神の啓示を受けたという隠者の話はノヴァーリス自身の体験を思わせるものがある。こうして物語に織り込まれている死は、個の中でのさまざまな存在形態であり、再生の観点から語られている。つまり死は消滅ではなく他の空間での自己の継続を意味し、仮象である此岸での存在の終結は超越の世界である天上の故郷での新たな始まりである。クリングスオールが語るメールヒエンは創世神話の形をとっているが、ここでは死んだ母の灰が生命の飲み物へと溶解し、人類の危機を救うのである。また物語の主人公は枠部分をも含めて、無垢の存在であり、無限の生の果実を内包している幼児の似姿をとって登場しており、無意識の領域の広大さと、可能性の豊富さをほのめかしている。

恋人の死という決定的体験を経て、第二部ではハンリッヒとツィアーネの対話の中でこの再生の概念がさらに煮詰められて、道徳化というピエティスムスの窮極の理想に沿ってそれが実現されるという見解に達する。こうして旧約と新約との関係にも似て、副題どうり第一部で「予示」(Die Erwartung)されていた死の意義が、第二部で「成就」(Die Erfüllung)される。「死」と「生」は対立しているものではなく内面的共感をもって絡み合っており、「生」は「死」を通過することで強められ実り豊かな新しい生へと高まって行くことを、この作品は総合的な視点から叙述している。

## 結 語

その後彼の創作の中心は詩作から哲学へと移行するのであるが、その転機の前触れを思わせる詩として注目されるのが104の „Elegie bey m Grab eines Jünglings“ (「ある若者の墓での悲歌」)<sup>47)</sup>である。ここでの若者とは友人であるらしいが、今までの語法、文体とは明らかに異なり、永遠性や天上の安らぎを示すピエティスムスの表現は殆んどなくなり („heimgegangen“ の語にかろうじてその名残が認められるが)、全体的に極めて現実味を帯びたものとなっている。死という苛烈な現実と直面して伝統は無力なものとし、 „Totenkranz“ „Aschenkrug“ „Grab“ „Urne“ という語から連想される「死」の意味する別離の最終性、そしてそれが引き起こす „Schmerz“ „Trauer“ „Verlassenheit“ „Einsamkeit“ 等、現実的な震撼、苦悩、寂寥感というネガティブな感情に重点が移されているのである<sup>48)</sup>。

死とそれに伴う無常感を歌ったものは以前ののものにもあるが、根本的な相違は冷徹とも思える写実性と彼岸に対する展望の喪失である。この諦めにも似た重苦しい描写は何に由来するのだろうか。

現実の具体的かつ人間的体験を、それと対照的に論理的な理念と融合し、一つの未知の世界を構築することが、死を認識しそれを作品にまで高めて行く創作行為の本質に他ならない。死を学ぶことにより自己と世界の実像は確かに拡大するであろうが、同時に詩的世界に一方的に感情移入することは次第に困難となり、このような客観的な態度を生みだしていると考えられる。その後、合理的な認識に克服の道を求めるかのようにフィヒテ研究に入っていくことになるが、この形而上的領域への跳躍はそうすると、死の問題と向かい合った初期の詩作期間に準備された必然的な帰結であったということになるのであろうか。

#### 注)

- 1) Vgl. Unger, Rudolf : Herder, Novalis und Kleist. Studien über die Entwicklung des Todesproblems in Denken und Dichten von Sturm und Drang zur Romantik. Frankfurt a. M. 1922 S. 41
- 2) Vgl. Wiese, Benno von : Novalis und die romantischen Konvertiten. In : Romantik-Forschungen Halle-Saale 1929 S. 210
- 3) Vgl. Ritter, Heinz : Der unbekannte Novalis. Friedrich von Hardenberg im Spiegel seiner Dichtung. Göttingen 1967 S. 216
- 4) Vgl. Strack, Friedlich : Im Schatten der Neugier. Christliche Tradition und kritische Philosophie im Werk Friedrichs von Hardenberg. Tübingen Niemeyer 1982 S. 135
- 5) Vgl. Samuel, Richard : Einleitung des Herausgebers In : HKA S. 2
- 6) Vgl. Dick, Manfred : Die Entwicklung des Gedankens der Poesie in den Fragmenten des Novalis. Bonn 1967 S. 189
- 7) Vgl. Heftlich, Eckhard : Novalis. Vom Logos der Poesie. Frankfurt a. M. 1969 S. 164
- 8) Vgl. Wolf, Alfred : Zur Entwicklungsgeschichte der Lyrik von Novalis. Ein stilkritischer Versuch. I. Die Jugendgedichte. Uppsala 1928
- 9) Vgl. Seidel, Margot : Friedrich von Hardenberg (Novalis) . Die unveröffentlichte Jugendlyrik. In : JFDH 1981
- 10) Vgl. Mähl, Hans Joachim : Die Idee des goldenen Zeitalters im Werk des Novalis. Studien zur Wesensbestimmung der frühromantischen Utopie und zu ihren ideengeschichtlichen Voraussetzungen. Heidelberg 1965
- 11) Novalis Schriften, erster Band (以下 Bd. I と略記) S. 459
- 12) Bd. I S. 459
- 13) この時期には、„An meine Mutter“ (Bd. I S. 514) のように、将来祖国のために勇敢に戦う息子たちと家を内助の功で支える従順な娘たちを育てるのが母親の使命だとするような、国家志向の詩も見られる。
- 14) Vgl. Sepasgosarian, Wilhelmine Maria : Der Tod als romantisierendes Prinzip des Lebens. Eine systematische Auseinandersetzung mit der Todesproblematik im Leben und Werk des Novalis. Frankfurt a. M. usw. 1991 S. 94-97
- 15) Bd. IV S. 41
- 16) 魂と神との一体感を力強く表現するため „entgegen“ „himmelan“ „himmelwärts“ „hinauf“ といった方向を表す前綴りや、力感溢れる動詞がよく使われている。また „Kraft“ „Fülle“ „Nahesein“ „Wirkung“

„Beleben“ „Erleuchtung“ „Erquicken“ „Beseelen“ という名詞が、神の内在、恩寵に与った充実感を表している。

- 17) Vgl. Sepasgosarian, W. M. : a. a. O. S. 38
- 18) Vgl. Sepasgosarian, W. M. : a. a. O. S. 235-237
- 19) Vgl. Seidel, Margot : Die „Geistlichen Lieder“ des Novalis und ihre Stellung zum Kirchenlied Bonn 1973 S. 202  
ザイデルは、殊にこの作品における „ewiglich“ „von Ewigkeit zu Ewigkeit“ といった永遠性を表わすピエティスムスの語法を指摘している。
- 20) 詩編84, 7に此岸を意味するこの表現が出てくる。
- 21) Bd. I S. 459-460
- 22) Bd. I S. 462-463
- 23) Vgl. Samuel, Richard : Einleitung zu „Frühe Lyrik“. In : HKA, Bd. I S. 449
- 24) Bd. I S. 479
- 25) Bd. I S. 505-506
- 26) Bd. I S. 507-508
- 27) Bd. I S. 509
- 28) Bd. I S. 510
- 29) Bd. I S. 508-509
- 30) Bd. I S. 510-511
- 31) Bd. I S. 511-512
- 32) Bd. IV S. 221
- 33) Bd. I S. 473-475
- 34) Bd. I S. 471-472
- 35) Vgl. Sepasgosarian, W. M. : a. a. O. S. 100-101
- 36) Bd. I S. 488
- 37) Bd. I S. 533
- 38) Najade に象徴される妖精が棲む水のモチーフはギリシャの古典以来のものだが、ヤーコビの „An Gleim“ やビュルガーの „An die Nymphe des Negenborns“ 等、この時代の詩人達が好んで使用しており、彼等に負うところが大きい。
- 39) Bd. I S. 502
- 40) Bd. I S. 535
- 41) Vgl. Sepasgosarian, W. M. : a. a. O. S. 106-110
- 42) 1793年、イエーナに赴く前には、もう読んでいたと思われる。
- 43) „Nacht“ „Sterne“ „Grufkleid“ „Bautgewand“ „Tod“ „Todesengel“ „Schlaf“ „Traum“ 等の語句にその影響が窺われる。
- 44) Bd. I S. 523-524
- 45) Bd. I S. 524-525
- 46) Vgl. Seidel, Margot : Die unveröffentlichte religiöse Jugendlyrik S. 286
- 47) Bd. I S. 534
- 48) Vgl. Sepasgosarian, W. M. : a. a. O. S. 116-117

# Die Jugendlyrik des Novalis

## Über das Todesproblem und den Pietismus

Koji MIKI

*Abteilung der Allgemeinen Bildung von  
der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama*

*1-1 Ridaicho, Okayama 700 Japan*

(Received September 30, 1993)

Dieser Aufsatz behandelt die Jugendlyrik des Novalis. Im Mittelpunkt von meiner Untersuchung liegt das Todesproblem. Es steht im engen Zusammenhang mit dem Pietismus, der die Grundlage für sein dichterisches Leben ist und sprachliche und inhaltliche Wirkungen auf seine Werke ausübt. Es gibt viele pietistische Prägungen in seinen frühen Werken. Hier ist der Tod hauptsächlich unter der Perspektive des Wiedergeburt anzusehen. Diese Vorstellungen stellen den Nährboden zum „Sophienmythos“ dar. Der Tod schließt bei Novalis beide Aspekte ein, d. h. reale Erfahrungen und den Idealismus. Es läßt sich bestimmen, daß das Todesdenken ihm den Weg zur Philosophie vorbereitet. Von diesem Standpunkt aus möchte ich die Einflüsse des Pietismus in seiner Jugendlyrik, besonders im Gedicht „An den Tod“, nachweisen und dann den Wandel seiner Todesauffassung darin betrachten.